

第4回神奈川県立県民ホール本館再整備基本構想策定委員会 議事録

日時：令和7年8月6日(水) 15:00~17:00

場所：大同生命横浜ビル 13階 会議室4

1 開会

○事務局

- ・ 会議を公開とし、傍聴者3名が入室
- ・ 事務連絡

○稲村委員長

- ・ 委員会成立の報告

2 議題 再整備の基本方針について

- ・ 資料2に基づき、事務局より説明
- ・ 小林委員、上野委員、三沢委員の事前聴取意見について事務局より説明

<小林委員の意見>

第1ホールの客席数について、基本的に多様な人が参加できるようにすることが現代の潮流である。観客の方をもっと優先させる発想があつてよいと思う。多様な観客を受け入れる仕組みこそを考えてほしい。劇場音楽堂のホール設備は、スタジアムとも、ライブハウスとも異なるという発想で、観客目線を取り入れることが大事。

第1ホールの舞台規模について、オペラとバレエを主軸にするのなら、そのために現在の必要水準を満たすステージにするのが適切だと考える。

第2ホールの客席数について、1,000席というのは中途半端に思えるが、ホールの位置づけによる。1,000席~1,200席の規模の文化施設が都内に増えている状況の中で、神奈川県として第2ホールをどのように位置づけるかだと思う。具体的には、市区レベルの施設を経て、県域での晴れの舞台として使うのか、それとも、第1ホールをオペラ、バレエといった大型あるいは集客力のあるホールとして使うのであれば、県民にとって使いやすい300席~800席の間ではないかと思う。

ギャラリーの多目的化については賛成。とはいえ、そのことによって基本的な活動が制限されることがないようにする必要があるようにも思う。

創造支援エリアについては、発表的な利用にも使えるように考えるのがよいと思う。その意味では、創造機能領域を、バックヤードにしてしまうのではなく、一般の人に見えるような仕様にするというあり方はある。創造機能については防音を基本としながら、柔軟に利用目的を変えられるようにしておくのがよいのではないか。

パイプオルガンについては、空間の大きさが重要だと聞いたことがある。

優先順位については、ホール機能と創造機能ではないかと思う。

<三沢委員の意見>

ギャラリーの仕様だが、500 m²、400 m²、300 m²のサイズがあれば、小さい美術館の展示室ぐらいの大きさとなり、巡回展を呼べる。全ての部屋で温湿度コントロールをして美術品を展示できるようにすれば、活用の幅が広がる。天井の高さは必要、6 m あればよい。

空間も重要だが企画力がより重要。質の高い企画展を実施することで、ギャラリー自体のステータスが向上し、みんなに借りたいと思われるギャラリーになっていく。県民ホールのギャラリーは、美術評論家の柳生氏など名だたる方がいた歴史がある。世界で活躍するアーティストも、県民ホールギャラリーで企画展を行っていた。近年の企画展も、若手作家にとって選ばれたい、憧れの対象になっていた。歴史を継承しつつ、新しいものを作ってほしい。

多目的利用について、ダンスや演劇、音楽ができるギャラリーというのは、新しい施設の特徴になって面白いが、あくまでもギャラリーとして考えてほしい。ギャラリーだけど、照明等の設備がありダンスや演劇が美術作品の中でできる、音楽もできるというものがよい。設備は、技術者がいなければ使えないものをフルで用意するより持込みを想定し、利用する人が創意工夫できる余地を残す方が面白さが出ると思う。

機能の共有について、ロビーでの展示はよい。大きな空間だと作品の見え方が変わる。より大きな作品も置ける。アトリエは、練習室など他の部屋と機能共有で実現すればよい。

映像について、美術作品としてはギャラリーでのプロジェクションで実現するかと思うが、ミニシアターの聖地である横浜という土地柄を考えると、ミニシアターもあれば文化施設としてより面白くなる。

その他、立地を活かした海が見えるガラスのロビー、上階のレストランなどは継承してほしい。

<上野委員の意見>

ひとりのバレーナとしての視点に立ち、思いや理想を綴った。劇場空間と向き合うアーティストの声として、汲み取ってほしい。

(空に向かって伸びる「メゾン」としての劇場) 理想とする「メゾン」としての劇場は、パリ・オペラ座のような存在である。バレエは身体の軸も意識も常に上に向かう舞踊であり、そのため、劇場もまた空へと伸びる建築であってほしいと願っている。限られた敷地を有効に活用するには、6階建て程度の縦型の建物が理想であり、ホールを2階とした上層に、スタジオなど多様な機能を持たせる構造を希望する。

(質感のあるスタジオ空間) スタジオは、アーティストが毎日汗を流し、創造を重ねる場所である。大小2つから3つのスタジオが望ましく、特に大スタジオは高層階に設けることで、自然光や風の流れを感じ、空と繋がるような開放感が得られる。オペラ座の屋根裏にあるスタジオは、まさに世界中のダンサーの憧れである。アーティストは、そのような「空間の質感」を本能的に求めているのだと思う。

(舞台と客席の一体感を生む構造) 舞台は、筒型(円筒状)の構造が理想である。横長の舞台では客席との一体感が得られにくいのに対し、筒型であれば舞台と観客が空間を共有しているという感覚が生まれる。このような構造は、バレエに限らず、オペラやミュージカルなど他ジャンルの舞台芸術においても、観客との一体感を高める設計として有効である。5階建て、約3,000席規模の劇場が実現すれば、スケールと親密さを両立できると考えられる。

(小ホールについて) たとえば音響に優れるなどの個性があれば、音楽公演のみならず幅広い表現の場として活用できる可能性がある。さらに建築デザインについても、奥行きや装飾性を重視し、使いこむことで味わいが増すような劇場であれば、他施設との差別化も図ることができる。

(横浜という土地の魅力を活かした空間づくり) 最後に、横浜という土地の個性を活かした劇場であってほしいと願う。例えば楽屋に船の汽笛がかすかに聞こえたり、客席から港の景色が見渡せたりする設計は、東京では実現が難しく、横浜だからこそ可能な演出である。

また、国内外のアーティストにとって、楽屋口やカンティーン(食堂)のあり方も非常に重要あり、「あの劇場のカンティーンは素晴らしかった」といった話題は、アーティストの間でも頻繁に交わされる。楽屋口も、道路に直接面するよりは、門をくぐって敷地内を進み、たどり着く動線があれば守られている感覚があり、安心して舞台に臨むことができる。

○稲村委員長

それでは、議論を始めたいと思う。議題は、「施設整備について」だが、内容は盛り沢山なので、大まかに2つに分けたい、最初に資料2が全体的な話になっているが、基本方針と求められる機能諸室についてご意見をいただきたい。

○雲龍委員

資料2について。ホール1とホール2が「国内外の一流のクラシック、オペラ、バレエ団体、文化芸術団体が利用したい施設」と同じ括りになっているが、役割を分けた方がよいのではないか。

ホール1が「国内外の一流のクラシック、オペラ、バレエ団体」ということであれば、県民の文化芸術創造活動を支援するなど、県民が主に利用するのはホール2の役割として集約した方がよいと思う。具体的には、「9. 県民の文化芸術活動の発表ができる施設」に求められる機能諸室は「5と同じ」となっているが、ホール2とするべきなのではないか。

○稲村委員長

ホール1とホール2の基本方針の区分についての意見であったが、これに追加したい意見はあるか。または、別の観点でもよいので意見はあるか。

○大辻委員

ホール1、2の設備について伺いたい。基本的に聴覚障がい者は手話を使うので、本人が舞台の前に立ち手話を行うが、大会などでは参加者からすると小さく見えにくい。そのため本人をカメラで撮影し、プロジェクターで画面に大きく映し出す方式をとる。プロジェクターの設置位置について、そのようなことが可能か。

また、大きな式典などの場合で来賓が来られるときには、プロジェクターの光が舞台上の来賓にあたり眩しいことがあるので、天井から投影できるプロジェクターがあるとよい。また、舞台から遠いところから映すのではなく、画面に近いところから映せるプロジェクターがあるとよい。

○事務局

プロジェクターの設置位置について提案いただいたが、まだ具体的な設備や配置の検討に入っていない。今後の検討において、参考とさせていただきたい。

○恵良委員

スペースが限られるので優先順位は明確にした方がよい。バリアフリー法が改正され、去年は横浜市の福祉のまちづくり条例や基準が改定された。特に駐車場やアクセシビリティの向上について、幅員や観客席あるいは舞台への動線は豊かに取る必要がある。また車椅子席等が客席の端になりがちであることを改めたり、トイレについて数が増えて広くなったりなど、車椅子でスムーズに移動できる空間が求められる。ガイドラインなど具体的な資料を作っている最中なので、前向きに捉えて、できるだけ情報を早く入手するようにした方がよい。

オープンロビーについて、自由スペースという発想が出ているが、その先に「居場

所は文化が提供できる」という考えを持つとよい。そうすると想定された機能を超える可能性が持てる。そういう姿勢で取り組んだ方が、自由スペースの性能が上がる。用事がなくても行ってもよい空間や居場所となるのがよい。そういった場で文化と触れることができ、広がっていくという考えを持つことが重要。

また、ホワイエとの関係は、レセプションや、パーティーでの利用が想定された際の動線面の問題もあるので、早めに見極めた方がよい。

また、脱炭素などエネルギーコストの問題も前向きに捉えた方がよい。後付けになると結果的に高くなる。屋外と半屋外でエネルギーコストが全く異なるので、必要だという意識を早めを持つとよい。

また、公開空地（一般の人が自由に出入りできる空間）と言われるものがある。そこが屋外、屋内、半屋外かにより使い勝手も動きも違うので、よく考えたほうがよい。屋外には広場状空地と歩道状空地があり、このエリアだと山下公園や水町通りとの関係を意識しなければならないので、そこも重要となる。特に山下公園を意識するとレベルの問題がある。グランドレベルをどの高さにするかによって、公園が見やすい、見にくいという問題もある。一方で山下公園との繋ぎを平面、道路のレベルでとるのか、デッキレベルを使うのか早めの検討がいる。また、人と車の動線、特に大型車両のルートは相当な都市計画上の制約になるため、早めの協議を行わないと具体的に難しくなる。

グランドレベルを設定しないと物流のレベルが決められない。また、メインホールのレベルは高さ制限の31mで収まるのか。グランドレベルとホールのレベルとその上に乗るかもしれない機能のレベルの設定が重要となる。

特にこの話をする際に、地下も含めた4つのセキュリティレベルの設定を早くしないとややこしくなる。高低差と用途によって必要なセキュリティレベルが変わるので、しっかり設定してプランニングに入らないと、かなり効率の悪い設計プロセスになる。もし、設計者が入った時に設計与件が決まっていないと、時間がかかり無駄な作業となるため、早めに必要な与件は整理した方がよい。

個人的には優先順位は明確につけるべきだと思う。ホール1の機能が国内外と県内のレベルの中でどう位置づくか。

創造空間の作り方は、AIなどが出てくるので、頭に置きながらも過剰にならない方がよい。創造空間をどう作るかは、横浜という立地を考えた時に県民ホールのポジションを高めることに繋がるポイントになるのではないかと思う。

○稲村委員長

優先順位、バリアフリー、創造スペースについて話ができたが、他に追加の意見はあるか。

○大辻委員

バリアフリーについて、難聴者が利用する場合、ホールに磁気ループが必要になる。県でも磁気ループの貸出はあるが、長さが短く使える席に限られることがあるため、基本的にはホールの下に常設の磁気ループを引いてもらえると、聞こえる人、聞こえない人の両者が楽しめる。

○長門委員

前回の委員会で言った方がよかったかもしれないが、基本方針が9つあるというのは多いので、少しまとめた方がよいのではないか。「創造」「交流」「育成」などいくつかキーワードが被っているので、基本方針は端的にしてそこから広げたほうが整理されるのではないか。

○稲村委員長

基本方針のまとめは私も気にかかる。まとめていくことも必要であるし、その中で優先順位を決めていく判断も必要になると思う。このことについて、重ねて意見はあるか。

○笹井委員

基本方針をまとめるのは賛成で、前回の議論でも出ていたと思う。前回、宮崎委員が「これまでの県民ホールでやってきたことを引き継ぐものは引き継ぎ、アップデートするものはする、足りないものは加える」という趣旨のことをおっしゃっていた。県民ホールは今まで素晴らしいことをやってきているし、アンケートを見ても県民に愛されていると思うため、そのような考え方もよいと思う。

色々な機能を持ちたいが、多少コストがかかっても何を継承し、何を改善しアップデートしていくのかという考え方かと思う。

○宮崎委員

笹井委員がおっしゃったとおり、「これまで県民ホールがやってきて良かったものは続ける。時代や社会が変わり、県民ホールが開館した時とは環境が変わっているものについて、今踏まえるべきことは更新する。他が代替しているものがあるなら優先順位を落とす。それから交流など、観に行く、演じるだけではない機能が文化施設に求められていて、それがあつて多くの人々が文化施設に愛着や価値を持てるならば実現する。物理的に使いにくいところがあれば完全に解決する。というくらいの気持ちでよい」ということを話したかと思う。

そういう意味では、県民や利用団体の意見を聞くと、客席や見え方、トイレなどの快適性に対するご意見がある。吹奏楽の方は客席数を減らさないでほしいと書いてあ

るが、快適性を考慮すると、もしかしたら客席数が減るかもしれない。ただ、それは減るのではなく、県民ホールの在り方の大きな転換であると、誰もが文化芸術を享受するための場として、今の時代につくるということに重きを置いたという意味で、客席数を削ったのではなく施設として転換したんだ、という考えで打ち出してもよいのではないか。そうなると思えば恵良委員がおっしゃったような、アクセシビリティなどをしっかり見ていこうというポイントにもなるのではないか。

○石田委員

まず、資料2に基づいて、基本方針が9つは多いという意見には賛同する。全方位を向くと今のようなのだが、それをまとめるキーワードを用意してはどうか。たとえばキーワードとして「優れた創造活動」ということは上野委員がおっしゃったようなメゾンとしてのあり方の肝となる部分なので譲れないところかと思う。

また、やはり県民のための機能が必要。それから、神奈川県はこの土地に建てる、ということもあり「国際性」「インバウンド」もキーワードになるのではないか。

恵良委員のおっしゃった「用事がなくても来られる場所」というのは非常によい表現だと思う。居場所のようなことがここで実現すると、魅力的な施設になる。例えばWi-Fiが自由に使えると高校生や大学生の居場所になるなど。そういった場所になるためには、人が惹きつけられてくるような機能が必要だと思う。また、「子ども」ということもあるかもしれない。こういったキーワードをご用意いただけないか。それを基に少し整理をすることもできるのではないかと思う。

次に、雲龍委員がおっしゃったホール1とホール2の主な利用をプロと県民で分けるという提案は考え方としてあると思う。一方で、県民も大きなホールを使うシチュエーションがある。誰が使うかという分け方もあるが、何に使うかも重要だと思う。

例えばピアノのリサイタルや室内楽なども考えられる。音響が素晴らしく柔らかな響き、華やかな響きになるといった特徴などがあれば稼働率も上がるだろうし、皆さんが使いたい場所になるのではないか。

ホールの大きさは、それぞれご意見があると思うが、ニーズをどう捉えるかが必要になってくる。ホール1の2,000～2,400席、ホール2の800～1,000席が適切なのかは、何を目的として整備するのかに左右される。

ホール2はパイプオルガンを置くのであれば、規模感を決める要素になる。規模感だけでいうと東京文化会館の小ホールは645席、旧県民ホールの小ホールが433席であり、1,000席となると新国立劇場の中劇場ぐらいになるので小さくはない。これを何のために整備するのかを念頭においた方がよい。

舞台の面数については、3.5面と2面舞台の根拠を教えてください。

またリハーサル室や楽屋の数や場所を、今の段階でどこまで考えているか教えてください。

最後に、製作工房が3室とあるが、念頭においているのが材料加工、衣裳・幕類、組立・塗装と書いてある。工房で火を使うか、金工や木工をどうするのかなどの想定もあった上での3室なのか。ここで細かく議論することなのか分からないが、色々な条件があるということは提示しておきたい。

○事務局

ホール1の3.5面舞台とホール2の2面舞台は、現在の県民ホールの舞台と同じような使い方をした場合の面積規模と想定している。

○稲村委員長

各部屋についての具体的な意見も出てきた。全体的な話については、最後に優先順位の話も含め、改めて意見をいただければと思うので、次に資料3について議論を進めていきたい。

まずは、検討のポイントとして、ホール1について意見をいただきたい。

○榊原委員

「3.5面舞台」という言い方は危険だと思う。オペラをする場合に、舞台転換をする機能として「何面舞台」といった言い方をする。例えば、奈落にあった舞台が迫り上がり本舞台が下がるなどがある、また、横須賀芸術劇場などはスライドする舞台機構を備えている。舞台面のスペースを示すためならば「本舞台の3.5倍」などの書き方でよいのではないか。

現存していた県民ホールを知っている人が多いので、そのことを念頭に各々専門分野を当てはめて発言をしていると思うが、ここに書いてあること全てを実現できるのかが気になっている。今まで足りなかったものを追加しながらこれまでと同じ機能を持つとなると、例えば2,500席を有するホール1でグランドオペラを上演するならば20の楽屋が必要であるとか、300、400、500㎡のギャラリーを持つのであれば、100～150坪以上のものが3つ必要となる。また、先ほど恵良委員がおっしゃったようなバリアフリー等の条件や、これからの時代にあったスペースの取り方を考えたら入りきるのか。

31mの高さ制限は、合理的な配慮があれば緩和ができるとしても、各々が専門分野について、これが理想であると言い始めると、せっかく議論したことが無駄になるかもしれない。そのため、必要なものは何であるかを皆さんで議論して決めていく、どういう劇場で何が必要かという議論が必要だと思う。資料3を一つずつ見ていくことも必要とは思いますが、劇場のポリシーが常に念頭に置かれていないと貴重な時間が無駄になる可能性があると思う。

この10年くらいの間にもみなとみらいエリアに5,000人、10,000人、20,000人収容

のライブハウスやアリーナが増えたことは、これからつくる山下町にある劇場の客席数を考える上で重要であると思う。何に使うかによって、客席と舞台の規模と機能が決まってくるので、どういう劇場が建つのか、それが劇場の中に全部入るのかも聞いてみたい。そうしないと机上の空論になってしまうのではないか。

○稲村委員長

議論の進め方についてご意見いただいたが、このことについてご意見はあるか。

○宮崎委員

以前に勤めていたロームシアター京都では、改修を行ったが敷地の制約なども多かったため工夫をして、例えばオペラを上演したい時には、それは毎日ではないということもあり、3つのホールの全部を使っていた。その際、舞台転換は場合によって他のホールにまで搬出するなどの対応もとっていた。このように、日頃ない規模のホールが催しがあるときだけ出現したり、一階席だけの料金を設定することで700席のホールが500席ぐらいのホールとしても使えるなど、ホールの数は3つだが、6つぐらいの役割を、ある一瞬だけ果たせるという工夫をした。それは運営の想定からそうなったこともあれば、設計者が工夫をした部分もあった。例えば、舞台はあるが楽屋の数が足りるのか、という時にはそういった工夫をするなどもあり得るのではないか。

○稲村委員長

榊原委員のおっしゃった優先順位も重要なことだと思う。検討のポイントについての議論を早く進め、その後、優先順位についても議論の時間を取るようにしたい。それでは、ホール1の客席規模についてもご意見をいただきたい。

○土田委員

我々は主にポップスを主催・興行しているので極端な意見になるかもしれないが、中ホールの必要性には疑問を感じる。800席や1,000席の規模のホールは、県内や横浜にもいくつかある。また、限られたスペースで、あれもこれもと作ることができないと思うので、宮崎委員が言っていたように、700席程度の利用については、2,400席の大ホールを1,000席の料金設定で使わせてあげるなどすればよいのではないか。また、バリアフリーのための必要なスペースを確保するためには、正面の噴水のエリアや人が滞留できるスペースも有効に使えばよいのではないか。要するに、大ホールの席数は減らしたくないというのが私の意見である。

○雲龍委員

興行を行っている立場からすればキャパシティは大きい方がよい。2,500席のホー

ルは、コンサートだと全席使えると思う。しかし、演劇の場合、間口が広すぎるため、間口を狭くする必要がある。そうするとサイドの席は見切れが発生するため、その席は売り止めにしないとイケない。そうすると2,500席のホールでも1,500席～1,600席で使うこととなる。先ほどホール2は県民向けにしてはどうか、と言ったのは、1,000席くらいでは興行が成り立ちにくく、1500席程度ないと興行では使いにくい。それならばホール2は県民が利用しやすいキャパシティにしてもよいのではないかと思う。もしそこにパイプオルガンを置くのであれば、ちょうどよい席数が400席くらいなのでそうなるのかと思う。または、パイプオルガンはギャラリーに置いてもよいのではないかと思っている。

○吉野委員

ホール1の3.5面舞台の話があったが、今は県民ホールの奥舞台は、走行型の音響反射板の格納スペースとなっていると思うので、リアプロジェクションは両立しないのではないか。今の県民ホールに倣って3.5面とされているが、奥舞台は広い方が多様な演出に対応しやすいのではないかと思う。

パイプオルガンについて、現在想定している1,000席のホールに移設するのは性能的に難しいのではないかと思う。水戸芸術館ではロビーにパイプオルガンがあり、閉め切れればコンサートができるという例もある。保存を前提にするならば、パイプオルガンの運用は大きな与件になるので、後から考えるのは難しいのではないかと思う。

○泉委員

電動車椅子など、大型の車椅子を使う人も観劇したいことがある。その際に前の方にすると後ろの人の視界が車椅子にかかり舞台が見えないなどの問題がある。そのため、大きいスペースを小さく使うという考え方で、車椅子用のスペースを別につくり、2,000席の内の10席か20席は、車椅子の方が使えるスペースにできればよいと思う。

また、障がい者の方の中には、感情や行動のコントロールが苦手な方もいるので、そういった方たちも気兼ねなく観ていただけるようなスペースがあるとよいと思う。

○稲村委員長

次にギャラリーの多目的化について、規模や総面積も議論のポイントになるかと思うが、ご意見をいただきたい。

○佐藤委員

ギャラリーについて、多機能利用と言っているが、美術に向けた専門的設えと舞台芸術の専門的設えは大きく異なるので、本当の意味での多機能利用は難しいのではない

いかと考えている。一方で、運用上の使用用途を限定しないことが重要であって、例えば、ホールほどの音響は得られないがロビーでミニコンサートを行うことが有効であったり、KAAT 神奈川芸術劇場で展覧会を行っているように、アーティストの想像力があればどんな場所でもコンサートや展覧会ができるので、使用用途を限定しなければ自ずと共用できると思う。

例えば、展示にふさわしい環境だと音を反射するような材料で視覚的にもシンプルな部屋になるので、音響性能を確保するのが難しい。壁をでこぼこさせたり、吸音することが難しいので、それでもそこでコンサートをやりたいという人が使える環境をつくるのが重要だと思う。

また、ギャラリーに美術館並みの性能を持たせるかという点もポイントとなる。温湿度管理をどこまでするのか、巡回展を行うならば消火設備もスプリンクラーではなく、美術品に配慮したガス系の消火設備が必要になるので区画する必要がある。どのレベルまでを展示する施設にするのかは大きな要素になる。

また、ギャラリーを3室に分けて想定されているが、その意味をよく検討した方がよい。最初から分かれているのか、または、大きな部屋として使えるようにしておく、状況によって3つとか5つなどに分けられるようにするのは大きな違いがある。部屋として分ける必要はあまりないのではないかなと思う。

次に創造支援エリアの製作工房やアトリエには専属のスタッフがつくのか、それとも貸室として使うのかで大きく異なる。ワークショップ室も演劇的な利用であれば練習室でよいし、技術的なワークショップならアトリエで兼ねられるのではないかな。研修室や創造室もどの程度の設備なのか、ということも考えることである。

要するに、専属のスタッフが配置されて、ある目的のために専有で使う部屋なのか、共用あるいは貸室なのかなど、創造支援エリアは様々な設定が考えられるのではないかな。

○稲村委員長

ギャラリーの用途や部屋数についてご意見いただいたが、他にご意見はあるか。

○長門委員

まず、美術と舞台の融合の話がでていたが、それは県民ホール建物全体が美術と舞台の融合した場所になるということであり、ギャラリーでどうするかの話ではないと思っている。

ギャラリーで必要な展示の設えと舞台に必要な設えは相反するところがあるので難しい。例えば、天井高が高いと音が響きすぎて音楽には向かなかつたりするが、できないということではなく、作家によっては音を出したりパフォーマンスや演奏をすることもあつた。ただ、両方を完全に兼ねた空間を作るのは難しいと思う。どう使うかに

余地を残すことはあっても、空間的に両立させるのは大変だと思う。

美術のための空間も必要である。この委員会の前に県民ホールを拝見した。元々神奈川県美術展を実施していたとのことで、最低 1200 m²が必要と考えてこの数値になっているのだと思う。ただ、さきほどご担当の方にお聞きした際には、貸ギャラリーとして使うならば 150 m²くらいの空間が使いやすいと県民から聞いているとのことだったので、500 m²、400 m²、300 m²という設定は考えた方がよいと思う。

また、パイプオルガンが弾けるギャラリーをつくるのは難しいのではないか。音楽は専門ではないが、先ほど吉野委員がおっしゃったような、開かれた空間に象徴的に置くということは考えられるかと思う。

優先順位としては、このホールは、バリアフリーなどに配慮されたこれからの時代に豊かに文化を享受する場所であると思う。基本方針に立ち返る気もするが、何を優先するか、何を目指すかを明確にすると優先順位も決まってくると思う。

○石田委員

新ホールの特徴として創造支援エリアが重要なポイントとなると思う。スタッフを配置するかもそうだが、どういう機能を持たせるのか。上野委員がおっしゃったようにパリのオペラ座などはホールの上に素晴らしいリハーサル室がある。今は夢を語っている段階だと思うので、そういう豊かな創造機能を備えたホールをつくるのであれば、創造支援エリアが肝であり、楽屋も含め今の想定する大きさや数で足りるのかを十分に議論する必要がある。

また、県にはもうひとつ KAAT がある。KAAT の持つ機能との差別化をどうしていくのかは気にかかる。

○恵良委員

今のご意見の関連で、県民の文化の支援、教育育成、創造力の発揮や場所の提供などは違うフィールドで論じておいて、その中で県民ホールでは何が必要かという切り口と、発信力の高いこの場所としての創造活動は何かという捉え方の両方がある。教育育成や支援など全体を正のスパイラルに持っていくために、県民ホールの役割をどう捉えるか。その検討の際には、KAAT や音楽堂など県内の他の施設があるので役割整理をしないと答えが出ない。県民ホールでやるにふさわしい創造性の発揮とは何かを議論しないといけない。どこかでそれを整理しておかないと議論が散漫になるのではないかと思う。

○宮崎委員

ギャラリーの多目的化について、これまでの県民ホールのギャラリーは、舞台芸術や美術とのコラボレーションなど色々やっていた。「ここは美術館ではないのだから」

といった意気込みで、美術ギャラリーではあるが表現のための制約となることを極力設けない運営により特徴づけられてきた過去があるというのを思い出した。ただ、それを設計の与件にするのは難しいだろう。美術館ではない施設に美術ギャラリーがあることの特徴が上手く出せたらよいと思う。

また、創造支援エリアが一つの肝になるということで、どこまで何を想定するのか。この中にレジデントカンパニーの個室というのがあるが、これはいったい何を指すのかが大事だと思った。想定があれば教えていただきたい。

本格的なレジデントカンパニーということなのか。または、フランチャイズでよく演奏してくれる楽団が多少荷物を置いていってよい、という程度であればちょっとした部屋でもよいかもしいない。ここは運営や施設の設計に大きく影響が出てくるころだろう。

また、創造支援エリアについてバックヤード的なイメージになっているが、小林委員のご意見にもあったが表に出てきてもよいのではないか。ただアーティストを支援する、創造活動を支援するといったバックヤードを充実させるというだけではなく、いかに地域と結びつけるか、地域と一緒にやっていく、あるいはアーティストに地域づくりを支援してもらうなどの視点を持ち、地域との結節点にするというイメージがあってもよいと思う。ただし、運営にスタッフが置けるか、広さがどうなるかということで、色々なことが変わってくると思う。

○事務局

レジデントカンパニーについては、これまでに議論にでてきた機能を一例として書いてあるもので、特に特定のことを想定しているわけではない。

例えば、主催事業の際に運営者だけではできないような専門的なものをやる時に、長屋のような形で、例えば障がい者関係、音楽関係、映像関係、美術関係などそれぞれの専門的な会社が出先みたいな形で一時的に入ることを想像しており、将来的にそういうものが入れるスペースを作るという意味合いで書いている。

○稲村委員長

ご意見をいただいているところだが、次の委員会も今回と近いテーマで行う予定である。次回にもご発言いただければいいところがあるので、ここで一度、優先順位について具体的な発言をいただきたい。もぎりとホワイエについて、意見はあるか。

○笹井委員

今後チケットレスがどのスピードで進むのか、本当に紙チケットが無くなるのかなどあるが、チケットレスは間違いなく進むであろうという中で、もぎりのスペースは、今までやってきたことを前提とするのではなく、将来どうなっていくかを前提

に、逆算して今現状はどうするべきかと考えるのがよいと思う。

パイプオルガンについては重要だと思っており、そもそも県民ホールを再整備したとき、このホールのビジョンやブランディングに繋がっていくのではないかと思う。以前にオルガニストから、西洋における教会にパイプオルガンがあるといった役割とは違う形で、日本でのオルガン文化が進んできたと聞いたことがある。小ホールのものは、公共ホールとして第一号のパイプオルガンであり、ステージ上に設置されているという貴重なものである。維持費や演奏回数など経済効率からすると色々なご意見があると思うが、どうやったら残せるのかという方法で議論が進むとよいと思う。

○稲村委員長

もぎりとホワイエ、またパイプオルガンについて意見があった。パイプオルガンについても重要な要素のひとつなので、ご意見があればいただきたい。

○恵良委員

パイプオルガンを置く場合は、オルガニストが必要と思うが、オルガニストを置くなどの仕組みも継承していくのか。

○事務局

まずパイプオルガンを残すかどうかの議論を考えていたので、オルガニストを置くかの検討には至っていない。

○稲村委員長

県民ホールの施設見学に行った際に聞いたが、パイプオルガンも楽器なので定期的に演奏の機会がないと傷むため、オルガニストを置くとは言わずとも定期的に弾いてくれる人が必要だと聞いている。他にオルガンについて意見はあるか。

○榊原委員

パイプオルガンは空間に対してつくるものなので、パイプオルガンを活かすとしたらそれに合うホールをつくるという話になる。1,000席に増やして同じパイプオルガンが今と同じ機能を出せるとは思わないし、オルガンの形状により舞台の大きさも音響設計もすべて変わる。そういう意味では、パイプオルガンを残すかどうかは非常に重要である。また、物理的なことに加え、恵良委員がおっしゃったようにオルガンという芸術をこれから育てていくというポリシーを含めて残すということでもある。

ホールでない場所に設置することも考えられるが、現存のオルガンが生きるスペースをつくる必要がある。私はぜひ残してほしいと思っているが、まずは残すかどうか重要な議論になる。

○稲村委員長

中ホールになった場合は、パイプオルガンとホールの音が合わない可能性があるので、オルガンを残すかどうかはホール2の規模と関係が深いところである。

残りの時間で優先順位についてまとめていきたいが、皆さんのこれまでの意見を聞いていると、ホール機能と創造機能が重要という意見や、基本方針をまとめる上で、創造、交流、育成といったキーワードの話もあった。考え方としては、これまでに継承したことを大事にしながら、50年前につくられた今のホールに足りない部分を補い、バリアフリー対応などこれからの時代に合ったものに変えていくといった意見があった。そういう中で何を優先するべきなのか、その辺りについて、ご意見をいただきたい。

○吉野委員

資料3では練習室が創造支援エリアに位置づけられているが、資料5の機能図ではホール1、ホール2のリハーサル室が舞台横の配置になっている。

リハーサル室は主催事業をするときには必要であるが、貸館の時にはホールで公演をしている間にリハーサル室を使わない場合もある。リハーサル室を使わない時には、貸室として外に貸せるような動線や位置づけを考えるべきかと思う。リハーサル室の面積をどう処理するかが、限られた条件の中にこれだけの機能を取める際に鍵になると思っている。

また優先順位という意味でギャラリーの多目的化について意見があった。美術の方はなるべくギャラリーとしての機能を優先したいとお考えかと思うが、ホール2とのバランスも優先順位としては検討すべきだと思う。ギャラリーに小ホールのような生音の音楽演奏ができるような機能を持たせるならば、ホール2の規模とのバランスが議論となる。ホール2の客席数とギャラリーの多目的化の話は連動しているのではないかと思う。

また、オープンスペースでの居場所が必要と、これまでも繰り返し重要なテーマとして出ているが、ギャラリーを生音や舞台芸術ができる場所として専用化を進めることで、ある種の見通しのよさや回遊性が犠牲になるかと思うので、居場所ということも合わせて議論すべきかと思う。

○稲村委員長

ギャラリーそのものの多目的化というよりも、他との繋がりの中で多目的化について捉えていくというご提案かと思った。どういうホールにしていくかという基本的な方針が総花的になっている部分があるが、優先順位について他に意見はあるか。

○宮崎委員

優先順位を落とすというのは言いにくいですが、あえて言うならばリハーサル室は2つなくても、という意見はそうかとも思う。また、パイプオルガンは横浜では他にもあることが頭をよぎる。違う残し方ができるならば、優先順位を落とすという選択肢もあるのかと思う。

○稲村委員長

優先順位が低いものを探すというのは難しいと思う。前回の委員会で、大ホールとギャラリーがこれまでの事業継承の核になるということは、みんな合意していたところかと思う。

○石田委員

優先というのが、会場の機能なのか人の専門性なのかすごく複雑な思いを持っている。私の立場からすると優れた創造の場であることが第一優先順位であってほしい。それが実現できるスペックが備わるのか、人の措置ができるのかも考えなければならぬが、その上でも、優先順位は優れた創造の場であることではないか。

もう一つ、国際都市横浜にある神奈川県のホテルとして、これ以上望むべくもない場所にある。そこで何が望まれるかという点、興行面においても創造面においても、とにかく人が集まる場であってほしい。そのために必要な人、もの、機能を備えてほしいと思う。山下公園から何の用事もないけれども人が流れてきて、そのホールの中では、例えば海外からのクリエイターがリハーサルをしているなど、魅力的な小屋であってほしい。

夢を語っている我々が、基本方針を上手く整理して共通認識を持って議論を進めていくことが必要。議論が行ったり来たりしつつも、ある程度の絵を描けることが大事だと思う。

その上で資料5のような検討になると思う。例えば私ならばホール2でバロックオペラが観たい、オーケストラピットがほしいと思うが、そのような場所としては音楽堂があるとなれば、優先順位が下がるなど。

この場を最大限生かすような魅力的な空間にしてほしいし、それが譲れない優先順位だと思う。

○佐藤委員

優先順位ということで、創造支援エリアの練習室について、国内外で一流の人達が使う練習室なのか、県民の人たちが日常的に稽古をする練習室なのかはどちらかに絞った方がよいのではないか。それを両立させるのは難しいと思う。

ホール2は現状の県民ホールより肥大化している印象がある。現在の小ホールに袖

はなく、客席数も含め大型化しているの、そこをどう考えるかがポイントとなる。

逆にロビーやホワイエ、ギャラリーとの連続性などは、建築的な工夫で解決できる部分があるのではないかと思う。その時にホール2にどれくらいの大きさが必要なのか、ギャラリーなりロビーなりで兼用可能なのか、もう少し小型化していくということもあるかと思う。

○稲村委員長

ホール2についての意見が多く挙げられている。創造エリアに比べてホール2は優先度が低いと考えられるかもしれない。

○恵良委員

一覧表では、国際的レベルの必要性の中にギャラリーの記載がある。また、下の方にギャラリーという項目が別途立てられている。ギャラリーにそれだけ力が入っているということだと思う。

ただ、国際的な水準でやれる多目的ギャラリーというのが本当に成り立つのか。ギャラリーの位置づけとして国際性を目指すのであれば、多目的でよいのかしっかり議論をしないといけない。

逆に、AIや映像技術が発展する中で、新しい技術やアート作品を神奈川から発表するというコンセプトであれば国際的な視点にも合ってくるのではないか。そうではなく、多目的なギャラリーをとということであれば、国際的なポジションとして本当に多目的でよいのか議論しないといけない。また、場所も人の目につくような場所にないといけないのかもしれない。

○稲村委員長

ギャラリーについてのご意見があった。優先度とまではいかななくても、こういうホールであってほしいといった、具体的な意見はあるか。

○恵良委員

そういう意味で、創造的なスペースが必要だと思った。創造活動の支援ではなく、創造活動の発信をすることをギャラリーで担っていくという感覚がある。メリハリを付けないと創造支援スペースの意味がぼけてきてしまうと思った。

○榊原委員

創造支援エリアは、ホール、ギャラリーに付随するものであって、独立するものではないのではないか。ホールもギャラリーもリハーサル室も貸すことになると思うが、例えば、ギャラリーを使用するとき、製作の延長として追加に必要なスペース

があれば、100 m²の予備室や、水や火を使える部屋などが考えられる。それをギャラリーに付随するものだとすると、もっと分解して、専門的な諸室として入れてしまった方がよいのではないか。

この委員会では優先順位的に、先ほど石田委員がおっしゃったような、かなり高度な創造的なものをつくるべきだという目線に立った、芸術性の高い劇場をつくるということと、一方で県民の目線に立った、また利用者の意見や希望を汲んだところからどういう劇場であるべきか、という両極端のカテゴリーとしてA案、B案に分けたほうがよいのではないか。

例えば山下公園からすぐの場所であり、カフェがあつてロビーでは中学生が勉強できる場所でありながら、夜は2万円のオペラを上演していてもよい。愛されるホールとしての考え方と、その中で行われる芸術的なことを二つに極端に分けて優先順位を凶ってはどうかと思った。

○雲龍委員

前々回の委員会でも申し上げたが、創造活動をする場はここにある必要があるのか。ここは発表の場として限定してしまってもよいのではないかと思う。創造活動をする場が必要だということには私も強く賛同するが、この場にある必要があるのかということをお願いしたい。例えば極端なことを言うと、今開発されている瀬谷のところにあってもよいのではないかと思う。

○稲村委員長

そういったメリハリをつけることもあると思う。製作工房は今の県民ホールにはない機能だが、ロイヤルオペラハウスでは、そこに製作工房を置くことにより地域の雇用を生み出すという事例もあるので、メリハリの一つとして考えるのもあるかと思う。最後に言い残していることなどはあるか。

○石田委員

劇場は生き物だと思っている。ホール1についてだが、機能が高ければ高いほど一般への供用のハードルは上がると思っている。どこまで機能を高めるのか、例えば、パリ・オペラ座バステューユや新国立劇場などのレベルなのか。これだけの大きな劇場で現代的な機能を備えるならば、プロフェッショナルでなければ使いこなせない。言い方が難しいが、そういう意味で県民が誇れるような場であってほしい。

例えば神奈川フィルハーモニーが演奏したときに、これだけの響きが実現できたということを、この劇場で誇ってほしいと思う。そのために、ふさわしい音響設計、さらに見切れがない座席設定、客席数などが必要だ。

劇場の空間を音響的な何かをせずに埋めることは、アーティストにとって非常に難

しいことだと思うが、ただ、その一体感が得られたら、観客にとってこの上ない幸せな場になる。そういうレベルのものを目指してほしいと心から願っている。

ホール2をどうつくるかはまた別だが、ホール1は高い創造空間であってほしいし、プロフェッショナルリズムが実現される場所であってほしい。

○稲村委員長

様々な意見がでた。全体的な意見、基本方針をどう整理するのかという意見、優先順位についての意見などをいただいたので、議事録も確認しながら、それらの意見をどう反映し整理するか、次回に具体的な議論を行っていければと思う。

3 閉会

○稲村委員長

以上で本日の議論を終了する。次の委員会は、本日と同じ会場で9月4日を予定している。次回も原則どおり委員会を公開としたいと思うが、よろしいか。

○委員

異議なし

○稲村委員長

それでは、これをもって本日の委員会を終了する。